

## アリストテレス『分析論後書』における 知識論と、認識論的懐疑

高木酉子

○アリストテレスの知識論と認識論的懐疑とを並べるのは、アリストテレスにとってはフェアではないと考えられるかもしれない。少なくとも、本稿で取り上げる『分析論後書』においては、アリストテレスは個々の基礎的信念の認識論的正当化の問題については必要以上に拘泥することなく<sup>(1)</sup>、直截に科学的知識の構造の分析に腐心したというのが、一般的な了解ともいえよう。

翻って、懐疑主義の伝統に立つセクストス・エンペイリコス<sup>(2)</sup>は、アリストテレス派を含む「ドグマティストたち」の哲学に対して、彼らの仕事の基礎をゆるがせるべく、認識論的懐疑の立場からの反論を丹念に組み立てた。こうした懐疑主義者の立場からすれば、認識論的懐疑はドグマティストたちの知識論と対等に対決をする。この種の懐疑は、知識と呼ばれるものの認識論的基礎づけを議論する土俵に立って、その上で、結果的に科学的知識の体系化の価値を一括して拒絶するからである<sup>(3)</sup>。

それでは、アリストテレス『分析論後書』の知識論の立脚点からするならば、アリストテレスの知識論と懐疑論との対決は、論ずるに価しない対決であろうか。

いや、そうではない、むしろアリストテレスの論理的著作は、懐疑主義の用いる議論との対比においても、その真価を発揮する側面を持つのではないか。総じて、認識論的懐疑論が依拠する明瞭性や確実性の基準に関しては、アリストテレスは探究対象や目的に応じて、そこで必要とされるにふさわしい意義を追究しているということは注意されてよい。そこへ、もう一步踏み込んで、『分析論後書』の知識論の本領、すなわち、論証による知識に関するアリストテレスの分析に焦点を絞るなら、そこで追究される推論や論証知の構造分析が、推論や論証に関わる懐疑主義者の方法論と鮮やかな対比を示すことに気がつく。一例として本稿では、『分析論後書』第一巻、論証を構成する述語系列の議論を取り上げ、そこに見られる項系列の無限遡行の議論を、懐疑主義者の論駁方式における無限遡行への言及と対比してみることにする。

## 1. 『分析論後書』第一卷三章

問題の、論証を構成する述語系列の議論は、『分析論後書』第一卷十九章から始まるが、まずは、アリストテレスが懐疑主義者たちの考え方に言及している箇所を、第一卷三章に見ておくことにする。アリストテレスはこの章で、論証による知識に関する二つの謬見について、そして循環論証の不毛性について論じている。

そもそも、論証的な知識とは、アリストテレスによれば、真なる、第一の無中項の（中名辞を媒介としない）原理から出発して得られるものである。原理とは、結論よりもいっそうよく知られ、結論よりも先であり、結論の原因となるものである。そこで、二つの謬見とは、次のような二種類の考え方を言う。まず、ある人々は、

（あ）第一の原理の知識をもっていなければならないのだから、知識は存在しないと考える。だがまた、ある人々は、

（い）知識はあるが、万事について論証がある

と考える。両者に共通するのは、論証を通じてのみ知識がある、とする点である。第一卷三章での、循環論証の不毛性についてのアリストテレスの議論は、後者の人々の考え方に対する反論となる。

ここで、今、留意したいのは、前者の人々、すなわち「知識がまったくありえないことを基礎に措定する人々」に対するアリストテレスの反論である。この人々は、「もしも、先のものの中に一番先のものがないとすれば、後のものの知識を先のもの知識に基づいて得ることは不可能である」と考える。アリストテレスによれば、この点では彼らも正しい。人は無限なものをすっかり尽くすことはできないからである。

ところが、論証することだけが事物の知識を持つことである限り、もし遡源が止まり、第一の原理があるとしても、これらの原理の論証が存在しない限りにおいて、これらは不可知なるものである。しかるに、第一のものを知ることがないとすれば、第一のものから帰結することの知識を持つことは、知識の限定ぬきの意味においても、本来的な意味においてもない。あるとすれば、それは「もしもそれら第一のものがあるとすれば」という仮定に基づくこととなる。

懐疑論者に対するアリストテレスの反論は、まずひとこと言えば、すべての知識が論証されうるものではない、というものである。論証を通じてのみ知識があるという考え方と、すべての知識が論証されうるものではないという考え方が、ここに相对

立する。このことを踏まえた上で、懐疑論者に対する第一巻三章でのアリストテレスの反論全体を、よく見届けなければならない。アリストテレスの反論は、全体としての『分析論後書』の成立がそこに懸かる論証知の分析に基づいているからである。

懐疑論者に対するアリストテレスの反論(72b18-25)の概要は、以下のとおりである。

すべての知識が論証されうるものではない。無中項の前提命題の知識は論証されえない。というのも、論証による知識を得るためには、結論よりも先のもの、すなわち、論証がそこから出発する前提命題の知識を持つことが必然であり、他方において、遡源が無中項の項連関に至ってどこかで止まるとすれば、これらの無中項の前提命題は必然に論証されえないものである。知識があるばかりではなく、知識にはある端初(arché)がある。この端初によって、われわれは諸項(horos)<sup>(4)</sup>を認識する。

下線部分が意味するのは、原理命題においてわれわれは、論証を形成する述語系列の端緒を得る、ということである。原文の arché の訳語として、下線部では端初<sup>(5)</sup>としたが、ここでの arché は明らかに、(すべてのもととなる)原理という意味合いとともに、出発点としての始まりという意味合いを持つ。ここで端初とされる原理命題は、論証という作業の出発点となる命題ではあるからである。ただし、前提命題は、二つなければならない。そこで、論証という視点からは、原理命題においてわれわれは小名辞と大名辞を得る。こうした小名辞や大名辞は、論証を形成する述語系列を可能にするための中項として機能することになる。そして、まさに中項の発見こそは、『分析論後書』第二巻で詳述されていくように、論証的知識による事物の探究における中心的作業となるものである。

ところで、『分析論後書』第一巻三章でアリストテレスが論証知に関わる無限遡行や循環論証を取り上げる議論については、こうした議論を髣髴させる言説を、以下のよう、ある懐疑主義的言論の中に見出すことができる。

## 2. 懐疑派の五つの方式から

ディオゲネス・ラエルティオスの伝えるところに、アグリッパなる人物が導入した

五つの懐疑主義的論法というものがある<sup>(6)</sup>。すなわち、(1)意見の不一致、(2)無限遡行、(3)相対性、(4)仮設<sup>(7)</sup>、(5)相互依存(循環論)、のそれぞれを論拠とする五方式である。この五方式は、セクストス・エンペイリコスも「比較的新しい時代の懐疑派」の伝える判断保留の方式として、『ピュロン主義哲学の概要』の中で紹介している<sup>(8)</sup>。セクストスが同書中、比較的初期の懐疑派の間で伝えられていると言う、やはり判断保留のための十の方式<sup>(9)</sup>と比べて、この五方式は論題に関わらず適用可能な、より一般的な議論方式と言える。懐疑主義者セクストスによれば、これらの方式は「ドグマティストたちの性急さを論駁するため」に用いられるのである。

それぞれの方式を、いま、セクストスの紹介に従ってまとめるならば、

(1)問題となっている物事に関して、判定不可能な<sup>(10)</sup>論争が起こっていることを見出し、それゆえに判断保留に到達する方式

(2)問題となっている物事を確信させるために持ち出されたものが、また別の確信させるものを必要とし、同様にして無限に遡り、どこから立論を始めればよいのか分からないために判断保留が帰結することを論じる方式

(3)存在する事物は、判断を行なうものやいっしょに観取されるものと相対的に、しかじかのものとして現れるが、本来的にどのようなものであるかについてはわれわれが判断を保留するところの方式

(4)ドグマティストたちが無限遡行に陥ったときに、何かあるものから出発するのであるが、その何かを立論することはせず、証明によらず合意に基づいて採用を要求する場合に成り立つ方式

(5)探究されている物事を確立すべきものが、探究されている物事に基づいて確信されることを必要とする場合に成り立つ方式  
ということになる。

そこで、注目したいのは以上の五方式のうち、推論の形式的側面に直接に関わる(2)無限遡行と(5)相互依存(循環論)の方式、そして、懐疑主義的論法において枢要な位置を占めるところの(4)仮設を論拠とする方式<sup>(11)</sup>、である。

論証の無限遡行と循環論とは、アリストテレスが『分析論後書』第一卷三章で、論証を通じてのみ知識がある、と言った人々の考え方に言及してこれらに反論した箇所を取り上げられた問題である。もちろん循環論自体は、論証知のあり方としてはアリストテレス自身、これを拒否している。無限遡行のほうも、アリストテレスは論証知

のあり方としてはこれを拒否する。懐疑論者の論法として、アリストテレスが受け入れることができないとすれば、それは、仮定したにすぎぬものをドグマティストが立論の出発として立てるとする(4)の方式ということになる。

ただ、たしかに懐疑主義者の各々の論法を単独に取り上げるならば、論法(2)、(4)、(5)に関連して、アリストテレスの立場は以上のようになる。しかし、これらの論法は互いに組み合わせられることにより、ドグマティストの論法に対する、——少なくとも形式的には——強力な、あるいは決定的な論駁法を提供する。実際にも、セクストス自身、ドグマティストの学説論駁においてアグリッパの五方式を組み合わせることが多い。セクストスはアグリッパの五方式の導入の際に、「探究されているものはすべて、以上五つの方式に帰着して」論駁できるということを、大略、以下のような仕方でも示している。

問題となっているものが、思惟されるものであるか、感覚されるものであるか、いずれかであるときに、次のように、反目（意見の不一致）があるとする。

- ・ 主張 A：「感覚されるものだけが真である」
- ・ 主張 B：「思惟されるものだけが真である」
- ・ 主張 C：「感覚されるものの一部は真であり、思惟されるものの一部も真である」

この反目は、判定不可能であるか、判定可能であるか、である。

もしも判定不可能であるなら、(アグリッパの方式1より)判断保留しなければならない。

もしも判定可能であるなら、

- ・ 感覚されるものによって判定される（選択1）か、
- ・ 思惟されるものによって判定される（選択2）か、である。

(選択1)の場合、

- ・ 感覚されるものは、感覚されるものによって判定される（選択1.1）か、
- ・ 感覚されるものは、思惟されるものによって判定される（選択1.2）か、である。

そこで、

(選択 1.1) 感覚されるものは、感覚されるものによって判定される、という場合、無限遡行に陥る<sup>(12)</sup>。(アグリッパの方式 2 より) 判断保留しなければならない。

- (選択 1.2) 感覚されるものは、思惟されるものによって判定される、という場合、
- ・ その思惟されるものは、さらにまた、思惟されるものによって判定される (選択 1.2.1) か、
  - ・ その思惟されるものは、感覚されるものによって判定される (選択 1.2.2) か、である。

(選択 1.2.1) の場合、無限遡行に陥る。(アグリッパの方式 2 より) 判断保留しなければならない。

(選択 1.2.2) の場合、相互依存に陥る。(アグリッパの方式 5 より) 判断保留しなければならない。

ところで、以上のような無限遡行や相互依存に至ることを回避しようとして

- ・ 合意に基づき証明ぬきで何事かを前提し、それに基づいて後に続く事柄を証明する (選択 1.3) とするなら、立論せずに仮設を立てることになる<sup>(13)</sup>。(アグリッパの方式 4 より) 判断保留しなければならない。

次に、

(選択 2) の場合、感覚されるものと思惟されるものが入れ替わるだけで、同様の帰結に至る<sup>(14)</sup>。

以上のセクストスによる論駁は、アグリッパの五方式を用いて形式的には完結していると言える。しかし、五方式のそれぞれの論法の一つ一つが、はたしてどこまで判断保留へと導く条件たりえているかということについては、認識論的にも問題は残る。先にも述べたように、いま、本稿で注目したいのは、方式(2)(4)(5)であるが、これらの三つの方式は、アリストテレスが『分析論後書』第一巻三章で、論証による知識に關

する謬見を論じる箇所です示す議論に、歴史的に呼応するものではないかとも言われる<sup>(15)</sup>。そこで、この章の残りでは、先に触れた『分析論後書』第一巻第三章の循環論証の不毛性に対するアリストテレスの議論を、懐疑主義者の相互依存（循環論）による方式と対置する。さらに、仮設による方式と関連して、懐疑主義者とアリストテレスとの、論理的探究における双方の特徴を明らかにした後、最後に、懐疑主義者の無限遡行の方式との対比として、次章で、アリストテレスの論証知における無限遡行否定説をみることにする。

相互依存の方式についてセクストスは、「探究されている物事を確立すべきものが、探究されている物事に基づいて確信されることを必要とする場合に成り立つ<sup>(16)</sup>。この場合には、いずれか一方を立論するためにもう一方を採用することができないから、双方について我々は判断を保留する」(PHI 15 (169-174))というふうに述べている。セクストスの言葉が示唆するように、また、セクストスによる先の実例が示すように、この方式は第一義的には、二つの項による相互依存の方式として機能する。しかし、二つ以上の項をめぐる循環論についても射程に入れる方式となることによって、この方式は他の方式と連携して力を発揮する。他方で、循環論証が射程に組み込まれることによってはじめて、例えば、循環がどれだけの項の間で成立しているかにより、相互依存の方式が論証の有効性を否定する機能を持ちえるか否かについて見解が分かれる、といった認識論的に重要な問題も生じてこよう。

そこで、アリストテレスが循環論の不毛性について論じる『分析論後書』第一巻第三章に、再び目を向けることにする。アリストテレスの循環論論駁の要諦は、「より先のもの」「より後のもの」両者の区別にある。すなわち、「論証がより先のもの、いっそうよく知られうるものから出発するものでなければならないとすれば、限定ぬきの意味においては、ものごとを循環的に論証することは、明らかに不可能である。というのは、同じものが同じものに対してより先のものであると共に、より後のものであるということは、異なった意味でなければ、すなわち、ある場合にはわれわれにとって「より先の」とか「より後の」という意味、他の場合には限定ぬきの意味ということがなければ、不可能だからである」(A Po72b25-29)。

翻って、懐疑主義者の依拠する相互依存の方式は、論証における前提命題や結論の担う認識論的位置づけの相違を、すっかり等閑に付すことによって機能を発揮するのである<sup>(17)</sup>。平板化という意味では、仮設による方式についても、同様のコントラスト

がみられる。仮設による方式の場合も、セクストスはやはり論証における前提命題や結論の担う認識論的位置づけの相違を、すっかり等閑に付す。

そこで、注目したいのは、アリストテレスにとって仮設とは、必ず、より先のものであるということであるが、「より先」とは、認識論的に「よく知られる」ものである、という意味であるばかりではないということである。論証において言われる「より先」とは、前章でも見たように、論証という作業における出発点という意味がある。このことについては、セクストスの伝えるアグリッパの五方式においてもやはり、相互依存の方式、無限遡行に至る方式、そして仮設による方式、いずれにおいても言及されているということにも注意したい。すなわち、

無限遡行の方式：

問題となっている物事を確信させるために持ち出されたものが、また別の確信させるものを必要とし、同様にして無限に遡り、どこから立論を始めればよいのか分からないために判断保留が帰結することを論じる方式

仮設による方式：

ドグマティストたちが無限遡行に陥ったときに、何かあるものから出発するのであるが、その何かを立論することはせず、証明によらず合意に基づいて採用を要求する場合に成り立つ方式

相互依存（循環論）の方式：

探究されている物事を確立すべきものが、探究されている物事に基づいて確信されることを必要とする場合に成り立つ方式

以上を踏まえると、論証において、より先のもの、つまりは出発点がなければならぬということの理解は、たしかに懐疑主義者も受け入れているということがわかる。それでは、懐疑主義者による論駁において、論証一般の方法的概念に関して、なぜ認識論的な平板化がおこるのだろうか。

懐疑主義者は、個々の命題の認識論的価値について問うけれども、認識の方法論については、類型的な図式に依存するということの一例にいま注目した。一方、論理学



的探究におけるアリストテレスの分析においては、論証が実際にある、という事実に基づいて、いかにわれわれは論証を行なっているかに即して分析が進む。懐疑主義者においては、実際の、われわれの思考の手順に対する分析そのものよりも、むしろ、知識の構成の仕方を分析せずに標準的な図式をそのまま用いて、個々の概念としての探究対象への接近の可能性に矛先を向ける、という形式をとる。少なくとも、論理的（認識論的）探究に限って言うならば、むしろ懐疑主義者が、個々の探究対象を確保しうるか否かに対する循環論的、あるいは無限遡行的探究を行なうのに対して、アリストテレスは、個々の対象を実際に確保することによってはじめて、われわれの知識の構成手順が明らかとなっていくそのメカニズムに、焦点を当てていると考えられる。あたかも、アキレウスは亀に追いつかない、と懐疑主義者が論じるのに対して、アリストテレスの探究は、アキレウスがひょいと亀に追いつくところから始まる、と言ってもよいかもしい。そこで、最後に、無限遡行による方式とアリストテレスの方法論の実際との対比である。

### 3. 『分析論後書』第一卷十九章～二十三章

『分析論後書』第一卷十九章でアリストテレスは、論証を構成する項系列は無限なものでありうるか、という問いを立てる。ここから第一卷二十三章にかけては、この問いをめぐる論考が中心となる。

この一連の論考の意義を理解するために注意を向けるべきことは、何か。それは、アリストテレスが分析する論証知の方法が、論証による事物の知識がある、という彼の主張と密接に関わっているということである。『分析論後書』第一卷十九章でも、その点に対する注意が喚起される論述となっている。論証知の方法は、事物の知識を論証によって得るといふことの形式的側面から分析される。以下に、原文とはやや異なる記号表示で内容抜粋をしていく。

まず、アリストテレスが念頭に置く基本的な枠組みとして、三つの項により、われわれは第一格全称肯定推論と第一格全称否定の推論を用いる。これらの推論における各々の前提が、推論の出発点であり、基礎に置かれる<sup>(18)</sup>ものである。そこで、

事物の証明は、CがAについてあることを中項Bを通じて（すなわち、大前提B-Cと小前提A-Bにより、結論A-Cを）証明し、さらに、BがAについてあることを他の中項を通じて、CがBについてあることを同じようにまた別の中項を通じて証明する、というようになされる(A Po 81b15-18)。

ここには、中項の発見の作業としての、アリストテレスの論証知の方法論が端的に示されている。これに対して、二項の間に中項が何もないにもかかわらず、片方の項についてもう片方の項がある、とただ思われることからなされる推論は、弁証論的推論である。また、

（論証における項として）付帯的でなく述語されるようなものがある<sup>(19)</sup>、…そのもの自体に即して述語されるようなものがある。(A Po 81b24-29)

述語されるものが、このように限定されたあとで、三つの問いが提示される(A Po 81b30-82a6)。

- ・ 究極の主語（他のものについてあることがないもの）からはじめて、無中項の述語が順に述語づけられる（主語AについてBがある、BについてCがある、CについてDがある・・・）とすると、この項系列は必ず止まるか、それとも上方に無限に進みうるか？
- ・ 逆に、究極の述語（そのもの自体に即しては何も述語づけられないもの）からはじめて、その間に中項のない主語が順に置かれるとすると、この項系列は必ず止まるか、それとも下方に無限に進みうるか？
- ・ 両端の項が一定のものであるとき、中項は無限でありうるか？例えば、AについてBがあるとき、中項Cがあり、次に、BとCとの間には別の中項があり、そのように次々と中項の系列は無限に進みうるか、それは不可能か？

以上の、第一巻十九章で提示された問いに対してアリストテレスは、項系列が上方に向かっても下方に向かっても有限であることを、二十二章で弁証論的・分析論的に

証明することになる。ただし、この結論に至る前に、続く二十章で、あらかじめ、項系列が上方に向かっても下方に向かっても有限であるなら中間に向かっても有限である、ということを示す。

述語系列が上方（全体的なもの・普遍に向かう述語系列）と下方（部分的なもの・特殊に向かう述語系列）において止まるとすれば、中項は無限にはありえない。A について B が述語される時、その中項が無限にあるとすれば、B からはじめて下方に向かって一つのものが他のものに述語される系列が無限に続いてよいことになるし、A からはじめて上方に B に達するまでに、無限の述語があってもよいことになる。(A Po 82a21-30)

続いて二十一章で、肯定の論証における項系列が有限であるとすれば、否定の論証における項系列も有限であることが示されたあと、いよいよ二十二章で、論証における項系列が上方と下方に向かって有限であることが論じられる。

まず、弁証論的に、より一般的に、述語づけに関して述べられる理由である。

論拠 1；事物の定義が可能であり、事物の「もともと何であるか」が認識されるものであり、他方で、無限を尽くすことが不可能であるとすれば、事物の「何であるか」に内含されるものに関わる述語は必ず有限でなければならない。それぞれの実体的本質において、付帯性の主語となる要素は有限である（したがって、下方への述語系列は有限である）し、また、実体的本質に含まれる要素、ならびに述語づけされる付帯性は有限である（したがって、上方への述語系列は有限である）<sup>(20)</sup>。  
(A Po 82b37-83b31)

論拠 2；述語されることがらについて論証があり、また、それについて論証があることがらについては、知っていることにまさる状態がなく、論証によらずにそれはありえないとすれば、そして他方で、証明によって結論とされることは前提を通じてしか得られないとすれば、それら前提を知らず、知っていることにまさる状態にもないときには、われわれは結論についても知識を持たないだろう。だが、もし

論証を通じた知識があるとして、仮設されたものから出発して知るといっているのでないときには、結論をなす両項の間にある述語系列は止まらねばならない。もし、止まらず、容認される述語の上には常に上位の述語があるとするなら、万事について論証があることになる。しかし、無限を尽くすことはできない。(A Po83b32-84a6)

続いて、分析論的に、特に論証における述語づけに関して述べられる理由があげられる(A Po84a8-84a28)。

論証は事物のそのもの自体に即してある限りのことに関する。つまり、事物に述語されるものはすべて、そのもの自体に即して述べられる。しかるに、事物のそのもの自体に即して述べられる述語は無限ではない。したがって、上方に進む述語の系列は止まる。したがってまた、下方に進む述語の系列も止まるだろう。

説明：「そのもの自体に即してあるもの」は、二つの意味で言われる、

- (a) 事物の「何であるか」の要素として事物に内含されるもの。例えば、「多」や「分割できること」は、数の定義の内に内含される。
- (b) 事物についてあるものであって、このものの「何であるか」の内に当の事物そのものが内含されるもの。例えば、「奇数」は、数についてそのもの自体に即してある。

これらはどちらも、無限なものではありえない。というのも、

- (a) 「何であるか」の要素として事物に内含されるものは無限ではない。さもなければ、定義もありえないだろうから。
- (b) 例えば、「奇数」について、今度はその述語となるものの中に「奇数」が含まれる。ゆえに、「数」も含まれる。こうして、「数」についてあるもののすべての内に、「数」がその第一の要素として含まれることになる。このようなものが蓄積して、一つのものの中に無限に含まれることはありえない。

上方に進む述語の系列も、下方に進む述語の系列も止まるとすれば、中項は有限である。ゆえに、論証は必然的に端初を持つ。したがってまた、万事について論証はあ

りえない（端初については論証はありえない）。

万事が論証可能であるか、あるいは、論証の過程を無限に辿ることができるか、このどちらかであるということは、すべての項連関が分割を許す（いかなる項連関も無中項ではない）ということである。論証されるものが論証されるのは、両端項の内方に項が挿入されることによるのであって、外方に付加されることによるのではない。したがって、この手続きを無限に辿りうるとすれば、二項の中間に無限の項がありうることになる。しかるに、中項は有限であった。

最後に、第一巻二十三章では、以上の諸論からの結論として、すべての項連関の構成要素としての無中項の、不可分な項連関について論じられる。

以上、アリストテレスの説明は、われわれが実際に定義を行なうということ、事物の「何であるか」を認識するということから、論証には端初がある、すなわち、すべてが論証可能なわけでない、ということをも導く、という流れを持っている。考究のこうした側面は、論証は無限に進みゆくかという問題、論証がすべてのものについてあるか、あるいは、論証は両端の項の一方から他方へと過程を全うするかという問題として提示される限りにおいて、懐疑主義者の問題設定と重なる部分を持つかに見える。しかし、他面、アリストテレスの論考は、項連関を述語系列という視点から把握し、中項の発見という作業を、述語付けというわれわれの認識論的方法に基礎付けするものである。

無限を尽くすことはできない、という一点において、懐疑主義者とアリストテレスは見解を共有する。だが、アリストテレスの論証知の方法論は、上方、下方、中間といった、どの地点とどの地点との間に無限逆行が存することになるのかの明確な分類が可能となる論考であることによって、なぜ無限を尽くすことができないかということの現実的根拠を与える。ここでは、無限を尽くすということに対する懐疑主義者の思弁性に陥っていないのは、むしろドグマティストのほうであるということに注意したい。

## 注

- (1) 例えば、M. F. Burnyeat, 'Aristotle on Understanding Knowledge', ed., E. Berti, *Aristotle on Science: The Posterior Analytics*, Padua, 1981, pp.97-139 を参照。

- (2) Cf. PH13.
- (3) 例えばセクストスにみる認識論的懐疑の文脈での、論理的（現代的には認識論的）、あるいは自然学的学説に対する論駁の議論が、どこまで形式的なものであるか、あるいはむしろ、ソフィスト的であるか、つまり、議論のための議論に陥っているかを論じることは、関連のない問題ではないものの本稿の主題ではない。正確には、セクストスにおいてはドグマティストの学説論駁の議論は、学説の肯定が否定よりも信憑性があるわけではない、ということを導入形式をとっている。しかし、それを導くために、学説を否定する議論を組み立てるのである。
- (4) Barnes は、この箇所のギリシア語 *horos* を「定義」と解する(Cf. J. Barnes, *Aristotle: Posterior Analytics*, Oxford, 1993, pp.5, 107.). このように読む根拠として、Barnes は『分析論後書』に関しては、定義と論証を扱う第二巻第三章の論考箇所に言及することとどまる。しかし、ここ第一巻第三章においては、あくまで項系列や項連関に議論の焦点が絞られていると考えられる。ギリシア語 *horos* を「項」と読む解釈として、例えば T. Aquinas, *Commentary on Aristotle's Posterior Analytics: A translation of Aquinas's Commentary and of the Latin text of Aristotle, with introduction and supplementary commentary by Richard Berquist*, Notre Dame, Indiana, 2007, pp.30-32 を参照。
- (5) 加藤信朗（『アリストテレス全集 1』岩波書店、1971、622 ページ）の訳語を借用する。
- (6) Cf. DL IX 88-89.
- (7) ギリシア語 *hypothesis* の訳である。今、ここでは、承認のための理由を与えないところの命題、と考える。
- (8) Cf. PH115.
- (9) Cf. PH114.
- (10) セクストスの用いるギリシア語 *anepikritos* の訳。あるいは、「判定されていない」。対立する二者間で論争が「終結・解決されない」という意味が込められているかもしれないが、判断保留に至るための一般的条件たりうるために、よりふさわしい読み方として「判定・解決不可能」という意味合いのほうを採る。
- (11) 仮設とは、懐疑主義者にとって、「証明を行なうことなく——すなわち、たんに主張するだけ」(PH II 121 Cf. PH II 107,153.)のものにすぎない。セクストスの言うところの「たんなる主張」というのは、議論により理由・証明を与えることと対置されることが多い。ただし、『学者たちへの論駁』では、「基準」(MVII 337,440,VIII 26)や、なんらかの「方法」(MVIII 436)

に依拠した主張と対置される文脈もある。

- (12) 感覚されるものは、感覚されるものによって判定され、その感覚されるものは、さらにまた、感覚されるものによって判定される。
- (13) セクストスによれば、もしも仮説を立てる人が信用されるのであれば、その都度、対立する事柄を仮説として立てても、やはり同じ程度に信用されることになるから。
- (14) セクストスは、感覚されるものによって判定されるとする場合の最後に、(アグリッパの方式3に当たる) 相対性を論拠とする方式にも言及している。すなわち、感覚されるものはすべて感覚する人に対して相対的である(ゆえに、人によって感じ方は一致せず、反目が生じるはずである)。思惟されるものについても同様である。
- (15) Cf. J. Barnes, *The Toils of Scepticism*, Cambridge UP, 1990, pp.121-122. アグリッパは、前一世紀の終わりにかけて、ちょうどアリストテレス哲学に対する関心が復興したころの人物であると考えられる。
- (16) ここまでは、ディオゲネス・ラエルティオスの文章と変わりはない。
- (17) セクストス自身は、相互依存の方式として、相互依存的な論証に限定的に依拠することはなく、相互依存的な概念・定義や、基準(k1,k2,k3・・・)と論証(a1,a2,a3・・・)の繰り返しといった形での変則的な相互依存も用いる。Cf. J. Barnes, *The Toils of Scepticism*, Cambridge UP, 1990, pp.62-63.
- (18) アリストテレスの論証理論における hypothesis である。
- (19) 「AについてBがある」と言うときに、それはAが、他のものでなくAであることによってBであるとき。「その白いものが人間である」ではなく、「その人間が白いものである」と言う場合のこと。
- (20) さきに十九章で限定されたように、論証知において述語されるものとは、付帯的ではなく述語されるものである(注19参照)。そこで、二十二章でさらに付言されるところでは、述語されるものとは、主語の「何であるか」についてか、主語の「性質」、「量」、「関係」、「能動」、「受動」、「場所」、「時間」のいずれかのカテゴリを述べるものである、ということになる。このうち、実体を示す述語は、主語が「まさにそれであるところのもの」か、もしくは「まさにその一種であるところのもの」を示す。それ以外のカテゴリの、他の基体について述語されることを要する述語は、付帯性を示す。例えば、「人間は白い」は、付帯性を述べている。一方、「人間は動物である」は、実体を示すのである。